

## 韓国歯科医史（韓国歯科医療の開化と発展過程）

奇 昌 徳

高麗時代より伝えられてきた我が国の医書に記録されている口腔領域疾患の治療法は、中国医書に記録されている法を、国内で容易に求めうる薬材を処方して行うという治療法が施術されていた。

この方法は、我が国での医科試験科目の医書には口舌と歯牙の篇に載っていて、医員であれば誰でも口腔領域の疾患を治療することができるようになっており、現在のように専門化された領域ではなかったが、主特技をもった医員もいた。しかし、当時は彼等を歯科医員とは呼んでいなかった。

我が国に於ける歯科・口腔領域に関する現代的な記録は、高宗二十年（一八八三）頃からであり、陸軍軍医小池正直の「朝鮮人はう歯がない」とか、仁川日本医院の田中親之の月別患者表にある下顎複骨折等の記録を挙げることができる。一方、高宗二十二年（一八八五）濟衆院のH・N・アレン（H.N. Allen 安連）は準備していた抜歯器具で麻酔をかけて抜歯したと記録している。この記録が、我が国における西洋医学式抜歯の最初の記録である。しかし、彼らはいずれも医師であって歯科医師ではなかった。

我が国に歯科医師が到来したのは、高宗三十年（一八九三年）、濟物浦（仁川）にきた日本人歯科医師野田應治が最初であり、四年後には深江尚弟が釜山で歯科医院を開設した。この頃、出張形式で歯科治療をしていた歯科医師は、日本の山口

県で開業をしている渡辺久鎭、神戸の米国人歯科医師ハロルド・スレイド (Harold Slade)、ジェームス・ソウエルズ (James Souers)、ダニエル・B・ニイー (Daniel B. Nye) 等がいる。その後、光武十年(一九〇六)一月に、米国の歯科医師 D・エドワード・ハン (D. Edward Hahan、韓大衛) が漢城(京城)で歯科医院を開院した。彼は、朝鮮総督府の歯科医師免許第三号をもらっているところから、少なくとも八年以上韓国で開業をしていたと言ふ事ができる。

我が国で総合病院に歯科が設置されたのは、光武八年(一九〇四)団立漢城病院の歯科で、歯科医師重城養二が赴任してから始まる。翌年光武九年には公立漢城病院と改編し、歯科部長に歯科医師飯塚徹が来任した。ところが、歯科部はわずか二年余りの間存在しただけであった。この頃、同仁会の龍山同仁病院にも歯科が新設されたけれども、専任科長は無く、韓国駐節軍指令部付歯科医師注連内堅石が出張診療をしながら佐野史郎の代診で歯科診療をしていた。一方、大韓医院では朝鮮総督府医院となつてから一九一一年三月、外科に歯科が附設され、歯科医師渡辺定亮が赴任して歯科治療を始めた。この歯科は一九一六年になつて独立したけれども、柳楽達見は科長署理として勤務したが、同年四月一日、京城医学専門学校規程が公布されるや、柳楽達見は兼任助教に発令され、歯科の拡張と共に一九一七年十二月には歯科医学得業士生田信保が医官として赴任して診療に臨むようになった。一九二四年五月二日、京城帝国大学官制が公布されて総督府医院を附属病院とする医学部になりながら柳楽達見は京城歯科医学専門学校の運営の為に辞退し、生田信保助教が科長に任命された。一方、京城医学専門学校も、官制改正により附属病院を昭格洞に新築して、歯科を新設し、科長に歯科医師野澤鈞講師が任命された。

セブランス連合病院附属医学学校には、一九一五年、米國歯科医師 W・J・スアイブレイ (W. J. Scheffley) が歯科学教授として赴任して歯科学教室を設置した。一九二一年 W・J・スアイブレイは帰国し、代わりに米國歯科医師ジョン・L・ブーツ (John L. Boots) が歯科学教授兼齒科科長として赴任し、一九二四年には齒科医師 J・A・マクアンリス (J. A. MacAnlis) が教授要員として赴任され、百二十坪三階の单独建物に治療椅子十台と二十七人の職員で国内最大の齒科とし

て米国式の組織で運営をしていた。

朝鮮人歯科医師は、一九一三年(大正二年)十一月十五日、朝鮮総督府令第百一号で歯科医師規則が公布され、この規則より日本で歯科教育を受けた咸錫泰(第一号)、韓東燦(第九号)、金昌圭(第十号)、李熙昌(第十七号)等が総督府免許をもらい、歯科医院を開設してからである。一方、入歯営業者の場合は、同年、警務總監部令第五号で発布された入歯営業取締規則による書類が接受され必要な試験を経て、李熙瑞が入歯営業者免許第一号に、孫啓弘は第二号、林炳奎は第四号、尹貞奘は第五号、崔益本は第七号などと続いて登録された。そして、一九二一年(大正十年)二月十四日に朝鮮総督府令第二七号で朝鮮歯科医師試験規則を発布し、十月九日から施行した第一回試験で高相穆一人が合格して、第十六号の歯科医師免許が発布された。第二回の歯科医師試験は一九二二年九月十三日より実施され、李相喆(第二号)、兪昌宣(第二四号)、邊世熙(第二五号)、李成模(第?号)、裴珍極(第三九号)等五人が合格した。この様にして歯科医師を補充していたが、良質の歯科医師を養成するためには歯科医学校が切実に要求されたのであった。

歯科医師養成の為の動きとしては、隆熙三年(一九〇九年)、米國歯科医師韓大衛氏が齒医学校を併設すると発表した事と、一九一三年四月、民濟病院の院長・韓民濟が長春館で齒科講習所創立總會を開催し、五月からは齒科医学生の募集をはじめた事があり、また、一九二一年七月、セブランス連合医学専門学校校長O・R・ヒブソン(O. R. Avison, 魚不信)が五十万円を出して齒科医専門学校の設立申請書を出した事等が挙げられる。この魚不信の齒科医学専門学校の設立計画はとても実現の可能性が高いものであったが、当局ではこれを保留した。これより少し遅れて、柳樂達見が齒科医師試験を準備する受験生の為の京城齒科医師講習所の設立請願書を京畿道庁に提出したところ、齒科医学校の設立申請書に変更して提出する様に指示され、富田儀作と柳樂達見両氏を創立者にして、十二月、京城齒科医学校設立認可申請書と改めて提出し、翌年の四月一日付けで京城齒科医学校として認可され、四月十五日、既に募集していた六十名の新入生を前にして開校式を兼ねた入学式を盛大に挙行了した。初めは夜間授業二年制であったが、翌年昼間授業に学則を改正し、一九二四

年、附属病院を新設して、一九二七年には新築した学校に移転した。一九三〇年、文部省指定学校に昇格され、朝鮮唯一の歯科医師養成機関になった。

一九四五年八月終戦になり、九月に校長柳榮達見が無条件で米軍政庁接收要員に学校を引き渡し、これを韓国人同窓会で引き受け、京城歯科医学専門学校として開校したが、一九四六年八月、国立ソウル大学校歯科大学に編入され、今に至っている。

歯科医師団体の始まりは、一九一二年頃、京城で開業していた日本人歯科医師五名が集まり京城歯科医師会と呼んでからである。その後一九二一年十月、地方の歯科医師を糾合して全鮮歯科医師会総会を開催した。この歯科医師会は一九三〇年六月に第一回『う歯予防デー』行事を全朝鮮に展開し、この運動を年例行事とした。一九二五年京城歯科医学学校出身朝鮮人達が集まり組織した漢城歯科医師会も、一九四二年京城歯科医師会に合併されたし、朝鮮医師協会も解散され、終戦の頃は朝鮮歯科医師会に統一されていた。この朝鮮歯科医師会は終戦で一応解散し、一九四五年九月に新たに朝鮮歯科医師会準備委員会を結成して十二月に創立総会を開催、朝鮮歯科医師会として出発した。一九四七年、国号制定に依り大韓歯科医師会となり、一九五九年、大韓歯科医師協会と改称し、現在に至っている。

朝鮮歯科医学会も新しく創立され、国号制定により大韓歯科医学会と改称されたが、一九六二年に解散し、大韓歯科医師会傘下に学術委員会を置き、十九個の分科学会を公認し統括している。

終戦直後、日本の歯科医療制度が一般化していた韓国の歯科医療社会が、六・二五動乱中、米軍歯科医師らとの合同勤務または米軍歯科医療機関への派遣教育等と、歯科大学の教授らの米国留学によって、米国系統の制度や教育、医療が輸入され、また、国際歯科医師団体ならび歯科学術団体への加入による学問の交流も盛んになって、現在はアメリカ式歯科と呼ばれるようになった。

一九四六年の夏より始められた無歯医村への巡廻無料奉仕は、その後、学生は勿論、個人、時には歯科医療奉仕団体を

組織し、移動歯科診療車での巡回診療又は無料歯科診療のセマウル歯科医療院を開設する等、色々な形で奉仕がなされている。その他、民間組織の朝鮮口腔衛生研究所、口腔保健委員会、口腔保健協会等が設立され、国民口腔衛生及び保健に関する啓蒙ならびに学術的・臨床的な研究を、国家機関である国立保健院又は大学研究機関とらんで施行している。

(韓国・カトリック医科大学外来教授)